高松市埋蔵文化財調査報告　第 162 集

店舗新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

東中筋遺跡

2015 年 6 月

香川県農業協同組合
高松市教育委員会

例　言

１．本書は、ＪＡ香川県桜町支店新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書で、高松市桜町二丁目に所在する東中筋遺跡の調査報告を収録した。
２．発掘調査及び整理作業については、高松市教育委員会が実施した。
東中筋遺跡の調査は、平成 26 年度に高松市創造都市推進局文化財課　文化財専門員　舩築紀子・波多野 篤、同非常勤嘱託職員　磯崎 福子・上原 ふみが担当した。
３．本報告書の執筆・編集は、舩築と磯崎が行った。
４．本報告書掲載の遺物写真撮影は、西大寺フォトに委託した。
５．本書の挿図として、国土地理院発行 2 万 5 千分の 1 地形図「高松北部」「高松南部」及び高松市都市計画図 2 千 5 百分の 1 を一部改変して使用した。
６．本報告書の標高値は東京湾平均海面（T.P）を表し、座標は国土座標第Ⅳ系（世界測地系）に拠った。また方位は座標北を表す。
７．出土遺構の縮尺は、1/40・1/100 を基本とし、出土遺物の実測図は、土器は 1/4、石器は 1/2 を原則とした。
８．本書で用いる遺構の略号は次のとおりである。
SK：土坑　SD：溝　SX：性格不明遺構　SP：柱穴
９．土壌及び土器観察の色調表現は、『新版　標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）による。
10．発掘調査で得られた資料は、高松市教育委員会で保管している。

目　次

第１章　調査の経緯と経過……2
第２章　地理的環境・歴史的環境……3
第３章　調査成果……5
第４章　まとめ……16

挿　図

第１図　調査位置図 (S=1/5,000) ……2
第２図　周辺遺跡分布図……4
第３図　東中筋遺跡遺構配置図……6
第４図　SK 平・断面図……7
第５図　SK ７出土遺物……8
第６図　SK ５出土遺物……9
第７図　掘立柱建物１出土遺物……9
第８図　SX ８平・断面図……10
第９図　SX ８出土遺物……11
第 10 図　SD ６平・断面図 ……12
第 11 図　SD ２・３平・断面図 ……12
第 12 図　掘立柱建物１平・断面図 ……13
第 13 図　SD １平・断面図 ……14
第 14 図　SP 平・断面図 ……14
第 15 図　SD1・2・3 出土遺物 ……15
第１表　土器観察表……17
第２表　土器観察表……18
第３表　石器観察表……18

写真図版

全景（南東から）……19
全景（北西から）……19
掘立柱建物１　完掘状況（西から）……19
SX ８　遺物出土状況（北から）……20
SX ８　A 断面（東から）……20
SK ５（東から）……20
SD １　A 断面（南から）……21
SD ３（西から）……21
SK ４（北から）……21
SK ９（北西から）……21
SD ２　A 断面（西から）……21
SD ６　A 断面（西から）……21
SK ７（東から）……21
SK29（北から）……21
SK ７出土遺物……22
SK ５出土遺物……22
SX ８出土遺物……23
SD １・SD ３・掘立柱建物１出土遺物……23

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯と経過

ａ．経緯と経過

平成 26 年度に高松市桜町二丁目 780 番地１、781 番地１において事業が計画され、事業者等から本市教育委員会（以下､市教委）に対して包蔵地照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではないが､「東中筋遺跡」に隣接することから、試掘調査実施の協議を事業者等と本市とで行った。協議後、事業者の依頼に基づき、市教委が平成 26 年９月 29・30 日の実働２日で、試掘調査を実施することとなった。

試掘調査の結果、当該地に遺構・遺物が確認できたため、市教委は事業者に対して、当該地において保護層を確保できない掘削工事を行う場合は、事前に埋蔵文化財に対する保護措置が必要である旨を伝えた。

その後、10 月に、当該地において事業を計画している旨の報告が、事業者である香川県農業共同組合からあり、当該地の文化財保護に対する協議の依頼が市教委にあった。協議内容は、①現時点での工事計画、②発掘調査の内容、③費用負担、④発掘調査を実施した場合の工程、について双方で協議を進めた。その間、当該地で工事が実施されることが確定したため、事業者から 10 月 14 日付けで文化財保護法第 93 条第１項に基づく埋蔵文化財発掘の届出が市教委に提出された。その届出を市教委から香川県教育委員会（以下、県教委）に進達したところ、10 月 29 日付けで県教委から工事着手前に発掘調査を実施する旨の指導があった。

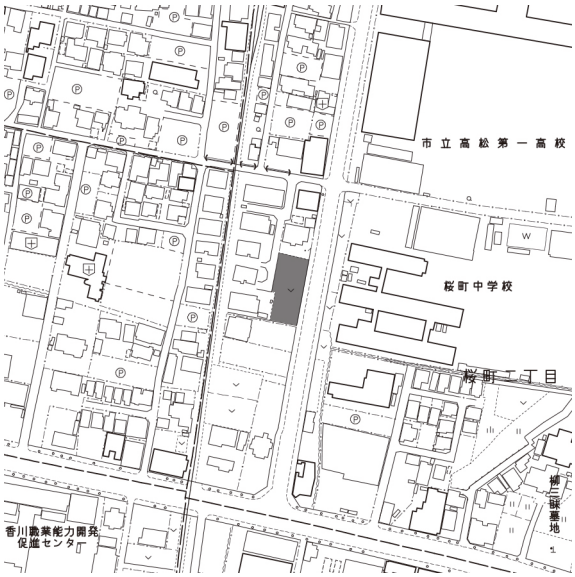
県教委からの指導を受けて、発掘調査の実施に向けて再度事業者と市教委が協議を重ね、費用面等の合意が形成されたため、12 月３日付けで事業者と高松市及び市教委の３者で協定を締結し、「ＪＡ香川県桜町支店新築工事に伴う埋蔵文化財調査監理業務」として、埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。

なお、協定書締結前になるが、事業者の意向で発掘調査全般を業務委託することとなり、11 月 28 日付けで事業者と事業者が選定した委託業者である株式会社村上組の双方で埋蔵文化財発掘調査に係る契約が交わされた。

調査の概要は次のとおりである。

対象面積：255㎡

調査担当：高松市教育委員会



第１図　調査位置図（S=1/5,000）

調査原因：ＪＡ香川県桜町支店新築工事

調査期間：平成 26 年 12 月３日～ 12 月 17 日

ｂ．本工事における埋蔵文化財の保護措置

平成 26 年９月に実施した試掘調査の結果から、現地盤から最も浅い部分で約 0.4 ｍの深さで遺構面が確認できた。遺構面から 30㎝の保護層を確保できない掘削工事は、基礎と梁の設置工事であったが、地盤改良を実施するため、包蔵地の範囲内の建物建設部分となった。

第２節　発掘調査の経過（調査日誌抄）

発掘調査は、平成 26 年 12 月３日から開始し、12 月 11 日に調査を完了し、調査道具の撤収を終え、現地調査がすべて完了した。調査期間は、実働で７日である。

調査日誌抄（平成 26 年 12 月３日～ 12 月 11 日）

12 月３日（水）　調査開始。重機掘削と遺構検出を行う。溝や土坑などの遺構を検出。

12 月６日（土）　人力掘削開始。ＳＤ１・２・３を掘削。平行して記録作業を実施。

12 月８日（月）　ＳＤ１・２・６、ＳＫ４・５を掘削。ＳＫ５から多くの遺物出土。

12 月９日（火）　掘立柱建物１、ＳＤ１・６、ＳＫ７、ＳＸ８を掘削。ＳＫ７から多くの遺物出土。

12 月 10 日（水）　ＳＫ７・９・29、ＳＸ８、ピットを掘削。ＳＸ８から弥生土器壺が出土。全景写真撮影。人力掘削終了。

12 月 11 日（木）　記録作業完了。道具の撤収作業を行う。現地調査完了。

第２章　地理的環境・歴史的環境

第１節　地理的環境

高松平野は、完新世に入ってから形成されたものである。讃岐山脈から南下し、瀬戸内海へと注ぐ香東川をはじめ、本津川、春日川、新川などによって搬出された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。現在石清尾山山塊の西を直線に北流する香東川は、17 世紀に人工的に固定されたもので、それ以前には石清尾山山塊の南側を回りこんで平野中央部を東北流する流路も存在していた。

本遺跡が所在する高松市街の中心に近づくにしたがい傾斜が緩やかになっており、ここには海岸線に沿って東西方向に延びる微高地の砂堆が形成されており、海の影響を受けていたと考えられる。ボーリングデータによれば、栗林公園付近から松縄町、久米池より北側では海成層の存在が確認されている。高松市街地付近では、現地表面下 10 ～ 12 m以浅が最終氷河期以降の堆積物であると推測できる。本遺跡に東隣する桜町中学校でのボーリングデータでは、現地表面下３ｍまではシルト質砂、３～７ｍは粘土、７～８ｍはシルト質砂、８ｍ以下は礫となっている。この現地表面下 8m が沖積層と洪積層の境であり、これより上が最終氷河期末以降の堆積物である。

第２節　歴史的環境

周辺部に位置する最古の遺跡として、縄文時代晩期中葉頃の居石遺跡がある。旧河道から突帯文以前の土器及び土掘り具を中心とした石器、伐採具と考えられる木製品が出土しており、安定した平野部においては既に開墾・農耕の初現が見られる。また平成 11 ～ 12 年に実施された東中筋遺跡の第２次調査では、縄文時代後期から近世に至る遺構・遺物が確認され、縄文時代晩期～弥生時代の小区画水田、縄文土器や弥生土器、石器が出土している。

弥生時代では海岸により近い遺跡として、環濠集落が確認された天満・宮西遺跡、弥生時代末～古墳時代の掘立柱建物跡等が検出された木太中村遺跡が挙げられる。近年では、海岸に位置する高松城跡下層の調査で、弥生時代後期の土器が海抜０ｍよりやや上位の砂堆から磨滅を受けずに出土する事例が認められ、今後の調査において海浜部でも遺跡が確認される可能性が高い。

平野部では弥生時代後期の集落が多く確認されており、古墳時代になると石清尾山山頂や尾根において多くの積石塚古墳群が造営される。なお、古墳時代の集落については、平野部において後期以降から出現する。古代においては、屋島で古代山城が築かれ、平野部では松縄下所遺跡で見られるような条里区画が認められるようになる。

古代末～中世では石清尾山の北東部から旧市街地に至る地域が野原庄に比定されており、その海浜部にあたる高松城跡（丸の内地区）では、９～ 10 世紀代の生活痕が確認され集落の所在が明らかになっている。さらに高松城跡（西の丸地区）では、12 ～ 13 世紀代の湊と考えられる礫敷きの港湾遺構が検出されている。平野部では、多くの城館が所在していたことが知られている。近世では、高松城の築造、それに伴う城下町の形成、香東川の付け替えとこれに関連した干拓と新田開発が進んだ。

【参考文献】

高松市教育委員会　1992・1996 『讃岐国府弘福寺領の調査Ⅰ・Ⅱ』

香川県教育委員会　1992 ～ 96 『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告　第１～６冊』

高松市教育委員会　1993 ～ 95 『一般国道高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１～７冊』

高松市教育委員会　1998 『宮川河川改修に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　木太本村Ⅱ遺跡』

高松市教育委員会　1998 ～ 2001 『太田第２土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第１～４冊』

高松市教育委員会　1999 ～ 2000 『都市計画道路室町新田線埋蔵文化財発掘調査報告書　第１～２冊』

高松市教育委員会　2001・2004 『都市計画道路東浜港花ノ宮線街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　東中筋遺跡　第１～２冊』

香川県教育委員会　2003 『高松城跡（西の丸地区）Ⅱ』

香川県教育委員会　2003 『高松城跡（丸の内地区）』

1　東中筋遺跡	2　稲荷山姫塚古墳	3　西ハゼ土居遺跡	4　松並・中所遺跡	5　キモンドー遺跡
6　天満・宮西遺跡	7　松縄下所遺跡	8　境目・下西原遺跡	9　史跡高松城跡	10　片原町遺跡
11　紺屋町遺跡	12　亀井戸跡	13　大井戸跡	14　雑賀城跡	15　藤井城跡
16　中ノ村城跡	17　特別名勝栗林公園	18　楠川城跡	19　鹿原遺跡	20　松縄城跡
21　佐藤城跡	22　室山城跡	23　奥ノ池遺跡	24　栗林田中遺跡	

第２図　周辺遺跡分布図

第３章　調査成果

第１節　調査の方法

ａ. 遺構番号と遺物の取上げ

遺構には、遺構の種類に関係なく検出した順番で１から番号を与えた。遺構の種類は、現地での調査所見をもとに性格を判断し、遺構番号の上に遺構の略号を冠した。

遺物の取上げは、遺構単位で、かつ出土土層が明らかな場合は、層位も記載して取上げた。

ｂ. 記録作成

図化作業の際に使用する基準点は、事業者が測量した世界測地系第Ⅳ系・４級基準点を用いた。水準点は、発掘調査の委託業者が、調査地に最も近い４級水準点から直接水準で基準点に標高を移設した。

以上のとおり設置した基準点を用いて、平面図・断面図ともに手測りで記録を作成した。

第２節　基本層序

調査区の基本層序は、耕作土（約 0.4 m）と床土（約 0.05 m）直下で、褐色細砂～シルトの地山面となり、遺構はこの地山面で重複して確認できた。

第３節　遺構と遺物

ＳＫ４（図４）

調査区中央南端で検出した不整形な形状の土坑で、調査区外へと延びる。最大長 3.1m、最大幅 1.3m、最大深 0.26m を測る。

断面は浅い皿状を呈し、埋土は、上層が黒褐色細砂混じりシルト、中層が黒褐色シルト混じり粘土と黒褐色細砂混じりシルト、下層が褐～褐灰色極細砂混じりシルトの４層である。

遺物は弥生土器片が出土したがいずれも細片で、詳細な時期は不明である。

ＳＫ７（図４・５）

調査区中央東側で検出した土坑で SD ３と SD ６に切られる。平面形状は卵形を呈し、最大長 2.0m、最大幅 1.6m、最大深 0.68m を測る。

断面形状は逆台形で、埋土は、上層が褐灰色シルト混じり粘土で、下層は水平に堆積し、褐灰色細砂混じりシルト、褐灰色シルト混じり粘土、褐灰色細砂混じりシルト、黒褐色粘土混じりシルト、褐灰色粘土混じりシルトである。

遺物は、弥生土器甕（１～10）、甕底部（11・12）、弥生土器無頸壺（13）、壺（14・15）、弥生土器片、微細剥離痕のある剥片（Ｓ１）、サヌカイト剥片が出土している。また、弥生土器壺（14・15）は、胎土が他の遺物とは異なることから、搬入品の可能性がある。出土遺物の年代から、弥生時代中期の遺構と考えられる。

ＳＫ５（図４・６）

調査区中央西端で検出した不整形な形状の土坑で調査区外に延びる。最大長 2.7m、最大幅 2.6m、最大深 0.84m を測る。

断面形状は方形で、埋土は上層が黒褐色中粒砂混じり極細砂～シルト、黒褐色中粒砂～シルト、黒褐色中粒砂混じりシルト、中層がにぶい黄褐色極細砂、黒色粗砂混じりシルト、黒褐色中粒砂混じりシルト、黒褐～灰黄褐色細砂混じりシルト、下層がにぶい黄褐色極細砂～シルト、最下層が黒褐～にぶい黄褐色細砂混じりシルト、暗褐色細砂混じりシルトである。

遺物は、弥生土器甕（16～24）、弥生土器壺（26～29）、弥生土器鉢（25・30・31）たたき石（Ｓ２）、弥生土器底部、粘土塊、弥生土器片、サヌカイト剥片、安山岩剥片が出土している。最下層から 16～18・20～24・26～31 と安山岩剥片が、下層から 19・25 が出土した。また、弥生土器壺（29）は、胎土が他の遺物とは異なることから、搬入品の可能性がある。出土遺物の年代から、弥生時代中期の遺構と考えられる。

ＳＫ９（図４）

調査区中央西側で検出した土坑で、平面形状は楕円形を呈する。最大長 0.9m、最大幅 0.6m、最大深 0.25m を測る。

断面は椀状に段落ちする。埋土は、上層が褐灰色シルト混じり粘土、下層が褐灰細砂混じりシルト、にぶい黄橙色細砂混じりシルトである。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

ＳＫ２９（図４）

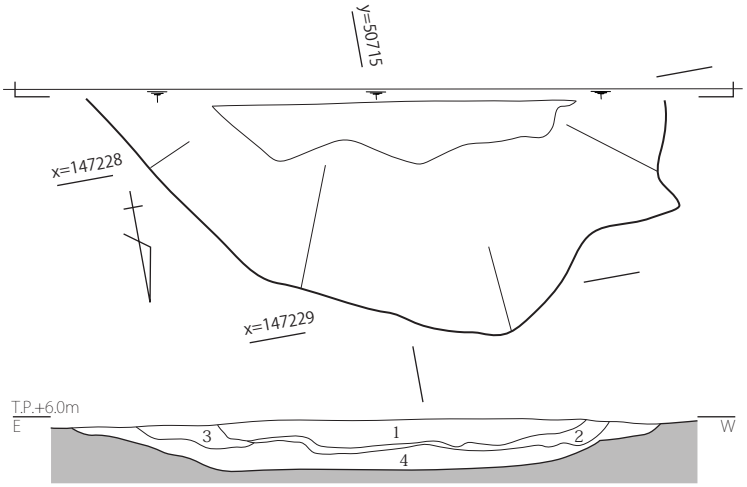
調査区中央で検出した土坑で、面形状は SD ６に切られて不明である。最大長 0.8m、最大幅 0.45m、最大深 0.1m を測る。

断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は、黄灰色シルト混じり細砂と黄灰色シルトの２層である。

遺物が出土していないため、時期は不明である。

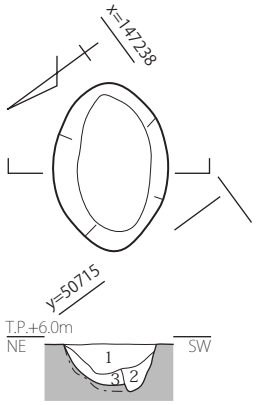
第３図　東中筋遺跡遺構配置図

SK 4



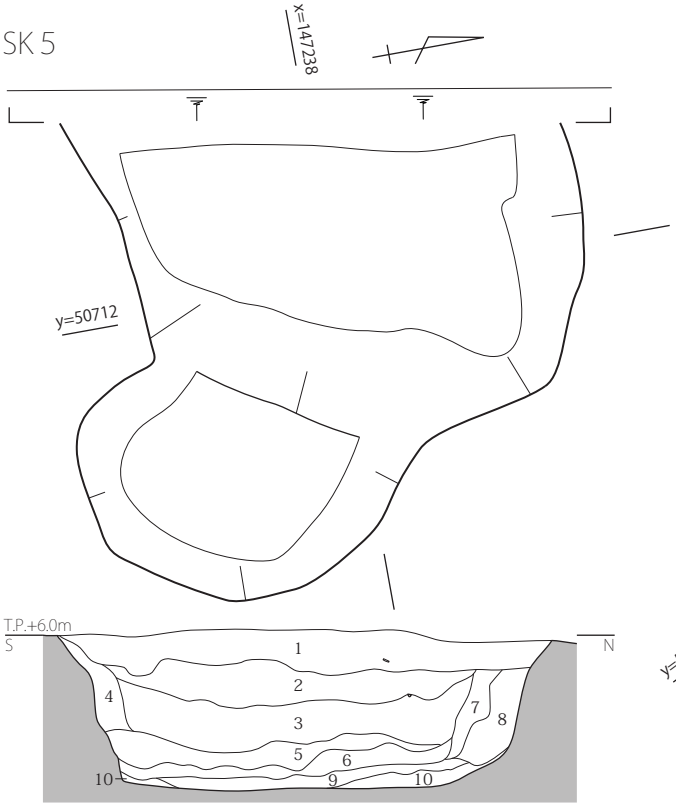
1　10YR2/2 黒褐　細砂混じりシルト　小石含む
2　10YR3/1 黒褐　シルト混じり粘土
3　10YR3/2 黒褐　細砂混じりシルト　粘性あり　径 1 ～ 2 ㎝程度の地山ブロック 5%
4　7.5YR4/4 褐 +10YR4/1 褐灰　極細砂混じりシルト　粘性あり

SK 9



1　10YR6/1 褐灰　シルト混じり粘土
　Mn 沈着　10YR7/1 灰白　細砂ブロック 5%
2　10YR6/1 褐灰　細砂混じりシルト
　Mn 沈着
3　10YR7/2 にぶい黄橙　細砂混じりシルト
　Mn 沈着　10YR6/1 褐灰　シルトブロック 1%

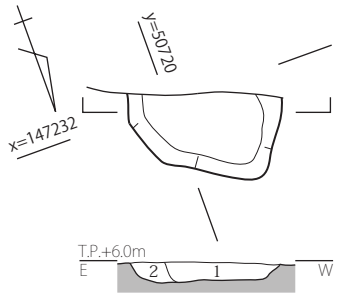
SK 5



1　10YR3/2 黒褐　中粒砂混じり極細砂～シルト　石器含む
2　7.5YR3/2 黒褐　中粒砂～シルト　径 0.5 ～ 1.5 ㎝大の焼土塊含む　炭化物含む
3　10YR2/3 黒褐　中粒砂混じりシルト　土器片含む
4　10YR4/3 にぶい黄褐　極細砂
5　10YR2/1 黒　粗砂混じりシルト　炭化物含む　土器片含む
6　10YR3/1 黒褐　中粒砂混じりシルト
7　7.5YR3/2 黒褐 +10YR4/2 灰黄褐　細砂混じりシルト
8　10YR4/3 にぶい黄褐　極細砂～シルト
9　10YR3/1 黒褐 +10YR4/3 にぶい黄褐　細砂混じりシルト
10　10YR3/3 暗褐　細砂混じりシルト

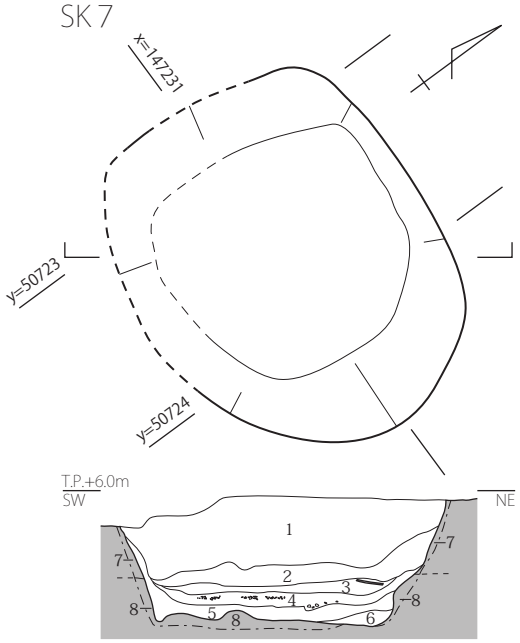
0　1m
(S=1 ／ 40)

SK29



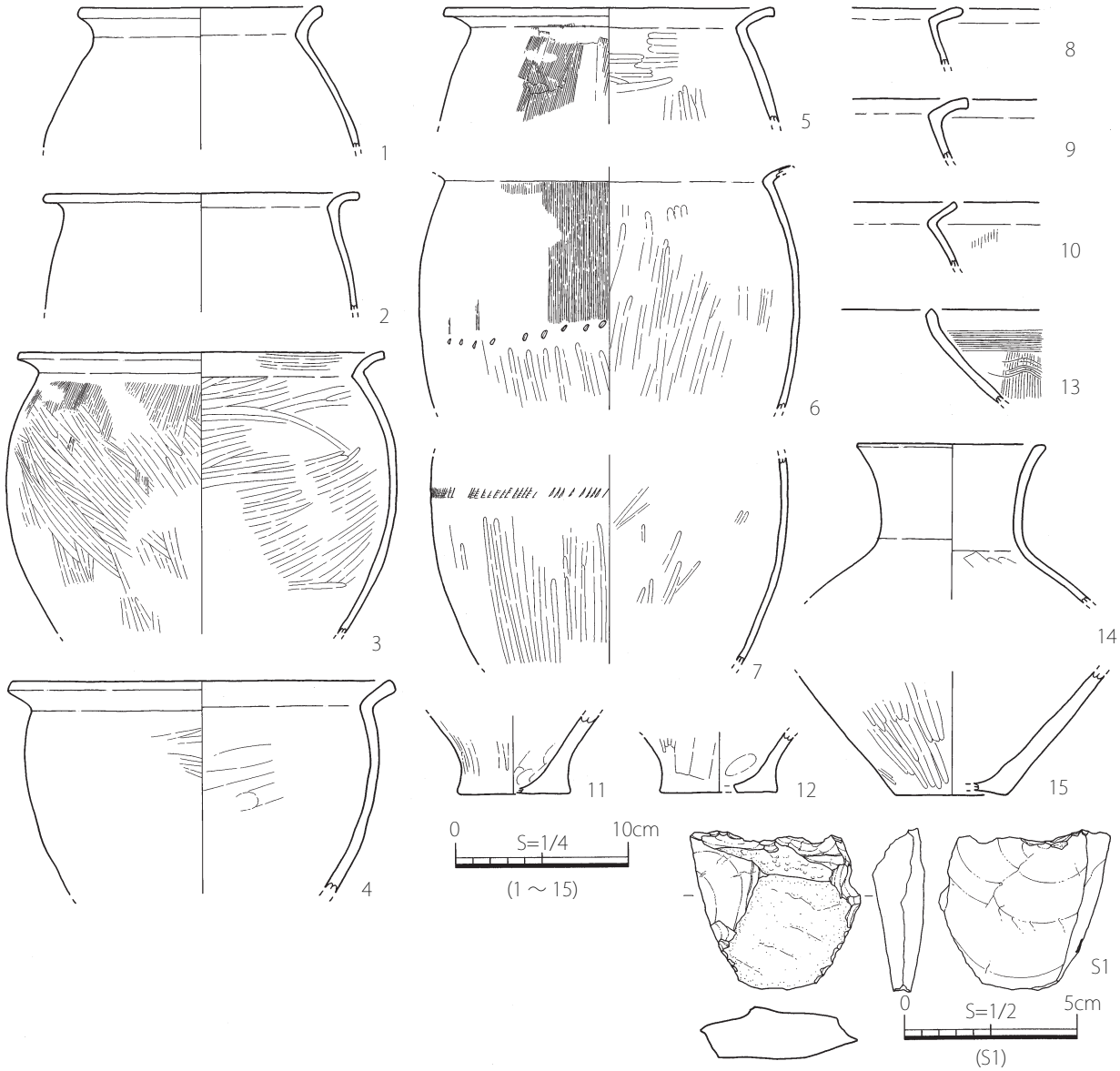
1　2.5Y4/1 黄灰　シルト混じり細砂　径 2 ㎝程度の地山ブロック 3%
2　2.5Y4/1 黄灰　シルト　径 5 ㎝程度の地山ブロック 2%

SK 7



1　10YR4/1 褐灰　シルト混じり粘土　粘性強　Fe 含む　土器片含む
2　10YR4/1 褐灰　細砂混じりシルト　Fe 含む　炭化物含む
3　10YR4/1 褐灰　シルト混じり粘土　炭化物含む　土器片含む
4　10YR5/1 褐灰　細砂混じりシルト　10YR6/1 褐灰　シルトブロック 7%
5　10YR3/1 黒褐　粘土混じりシルト　10YR6/1 褐灰　シルトブロック 1%
6　10YR6/1 褐灰　粘土混じりシルト
7　10YR6/4 にぶい黄橙　細砂混じりシルト　Fe 含む…ベース
8　10YR3/1 黒褐　シルト混じり粘土　粘性強…ベース

第４図　SK 平・断面図



第５図　SK ７出土遺物

ＳＸ８（図８・９）

調査区西端部で検出した不整形な遺構で、湾曲して南東へ調査区外に延びる。SD １・２・３・６に切られる。長さ 11.5m、最大幅 1.9m、最大深 0.28m を測る。

断面形状は不整形で、埋土は東側で上層が灰黄褐色シルト混じり粘土、中層が褐灰色細砂混じりシルト、下層が灰黄褐色細砂混じりシルトの３層である。下層から弥生土器壺（図９-34）が出土した。西側では、上層が灰黄褐色シルト混じり粘土、中層が黒褐色粘土と褐灰色シルト混じり細砂、下層が褐灰色粘土混じり極細砂～細砂である。

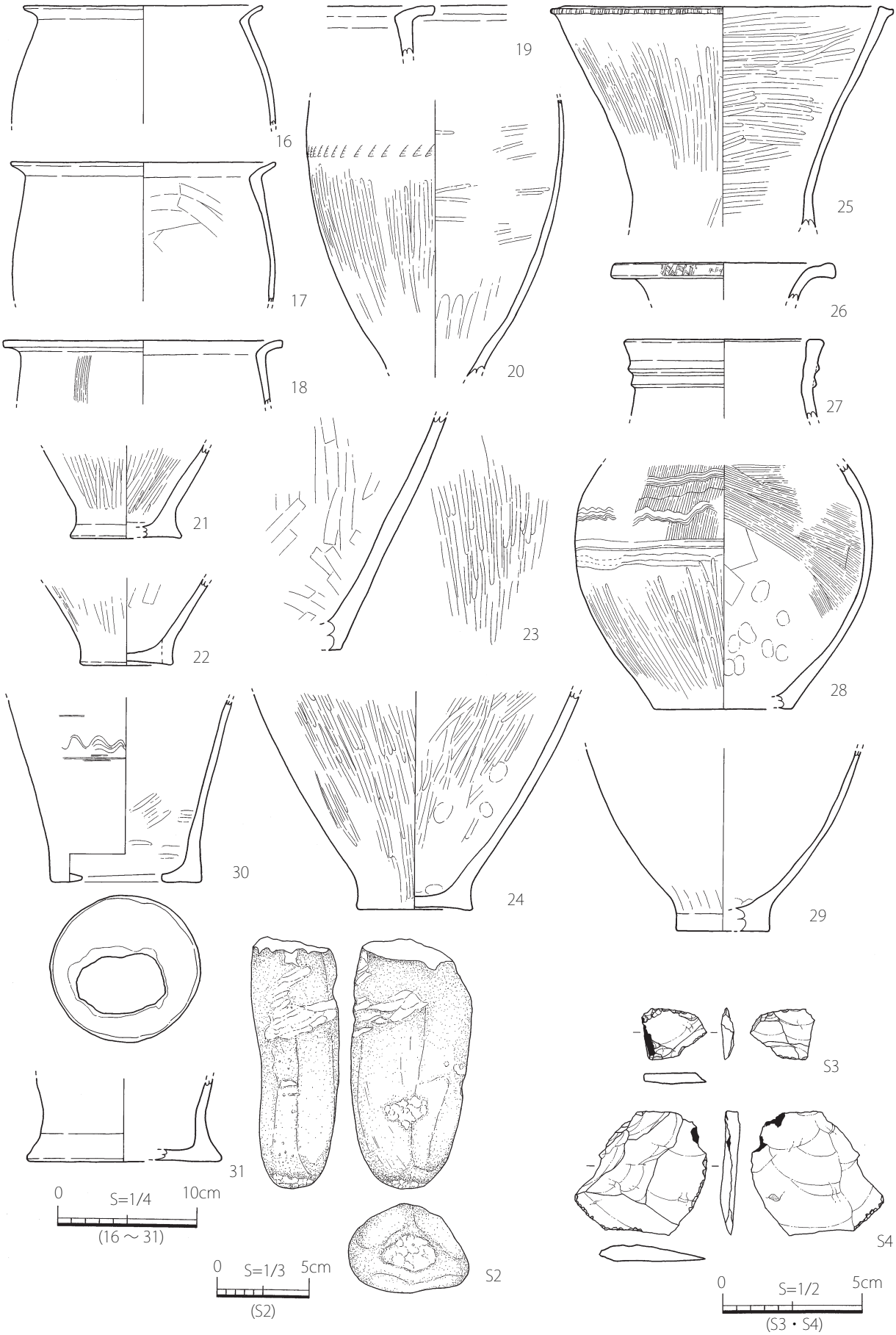
遺物は、弥生土器壺（32 ～ 34）、弥生土器高杯（35・36）、スクレイパー（Ｓ５）、たたき石（Ｓ６・Ｓ７）、石皿（Ｓ８）、弥生土器底部、弥生土器片が出土している。このうち、弥生土器壺（34）は、口縁部が欠損し、体部に穿孔がある。土器の形状や胎土から、搬入品の可能性が考えられる。出土遺物の年代から、弥生時代後期中～後葉の遺構と考えられる。

ＳＤ６（図 10）

調査区を東西に横断する溝で、SD １・２・３と掘立柱建物１に切られる。検出長 19m、最大幅 0.7m、最大深 0.13m を測る。主軸方位 N-66.5°-W である。

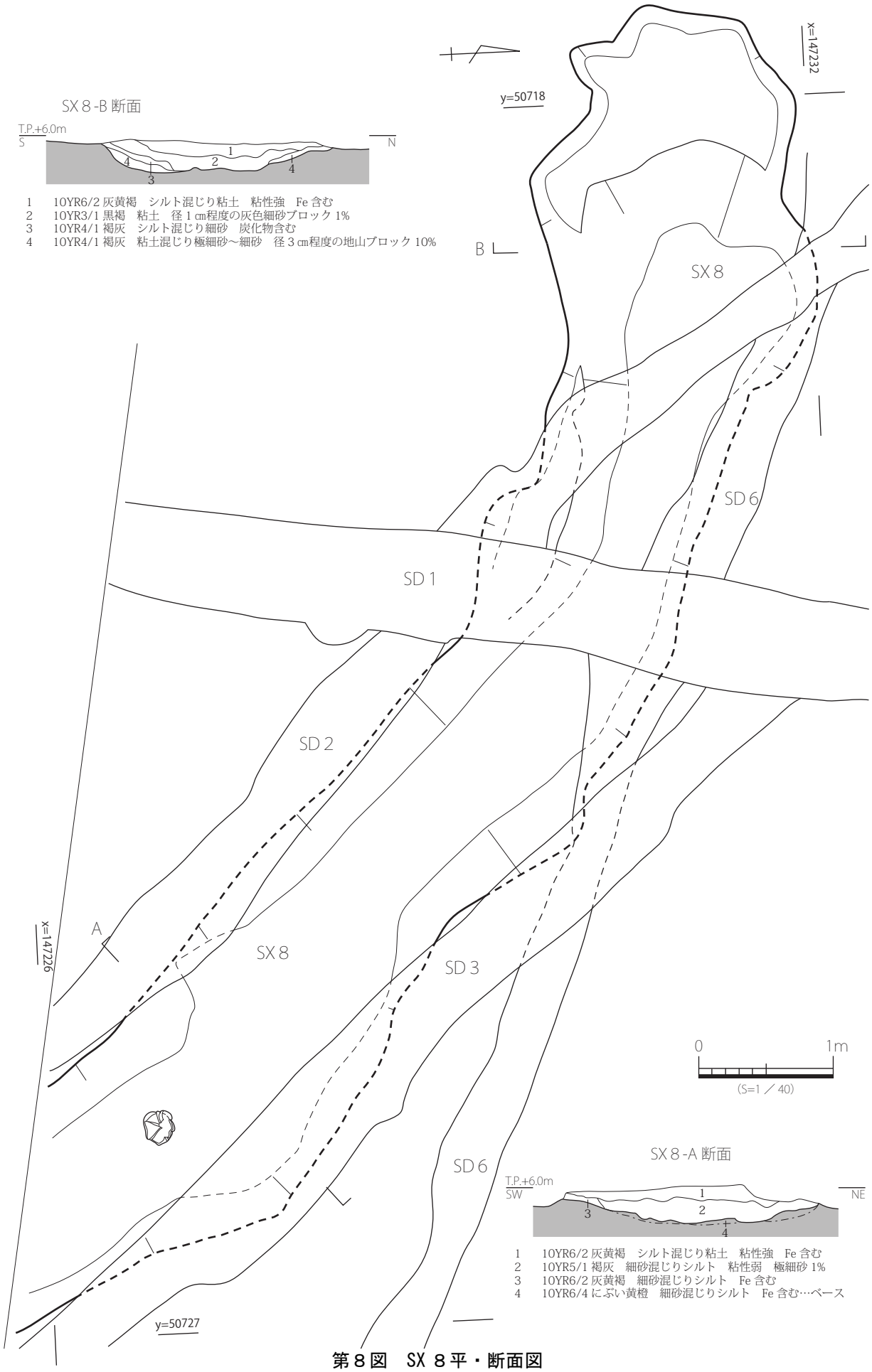
断面形状は、東側でＵ字形、西側で浅い皿状を呈する。埋土は、東側で灰黄褐色細砂混じりシルトの単層、西側で上層が褐灰色シルト混じり粘土、下層がにぶい黄橙色細砂混じりシルトの２層である。

遺物は弥生土器片が出土しているが、小片のため詳細な時期は不明である。

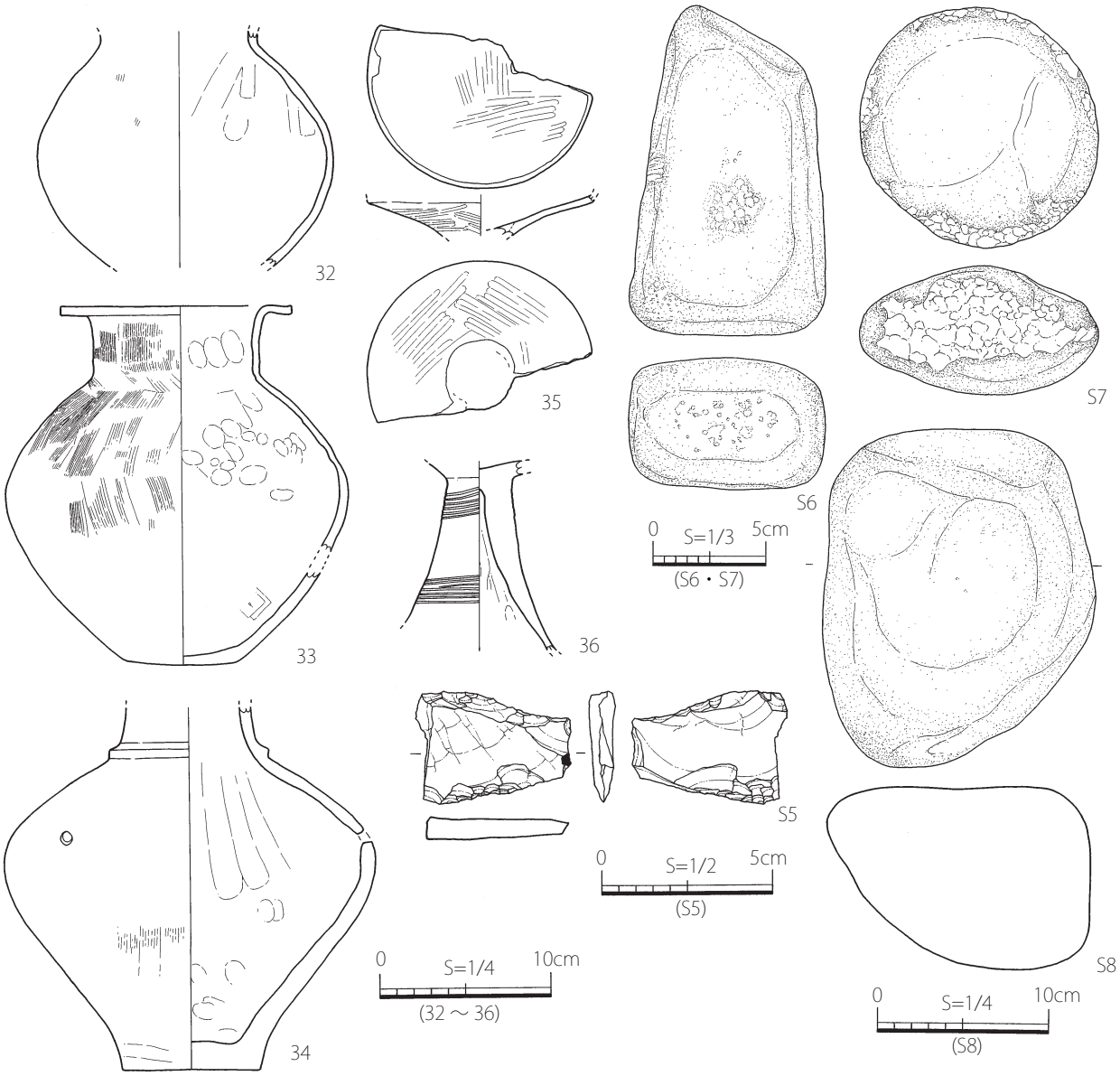


第６図　SK ５出土遺物

第７図　掘立柱建物１出土遺物


SX８-B 断面
T.P.+6.0m
S
N
1
2
3
4
1　10YR6/2 灰黄褐　シルト混じり粘土　粘性強　Fe 含む
2　10YR3/1 黒褐　粘土　径１㎝程度の灰色細砂ブロック 1%
3　10YR4/1 褐灰　シルト混じり細砂　炭化物含む
4　10YR4/1 褐灰　粘土混じり極細砂～細砂　径３㎝程度の地山ブロック 10%
y=50718
x=147232
B
SX８
SD６
SD１
SD２
A
x=147226
SX８
SD３
SD６
0
1m
(S=1／40)
SX８-A 断面
T.P.+6.0m
SW
NE
1
2
3
4
1　10YR6/2 灰黄褐　シルト混じり粘土　粘性強　Fe 含む
2　10YR5/1 褐灰　細砂混じりシルト　粘性弱　極細砂 1%
3　10YR6/2 灰黄褐　細砂混じりシルト　Fe 含む
4　10YR6/4 にぶい黄橙　細砂混じりシルト　Fe 含む…ベース
y=50727

第８図　SX ８平・断面図



第９図　SX ８出土遺物

掘立柱建物１（図７・12）

調査区中央西側で検出した掘立柱建物で、SD6 を切る。２間×５間、ピット 16 基で構成される。桁行 5.3m、梁間 3.0m、芯芯間距離 1.5 ～ 0.6m を測る。主軸方位は N-89.4°-W である。

ピットの形状は円形で、断面形状は U 字形と筒型を呈する。深さ 0.3 ～ 0.1m、埋土は、おおむね柱痕が黒褐色極細砂～シルト、掘方埋土が暗褐色中粒砂混じり極細砂～シルト、灰黄褐色極細砂～シルト、にぶい黄褐色極細砂～シルトである。SP18 以外は柱痕が確認できた。

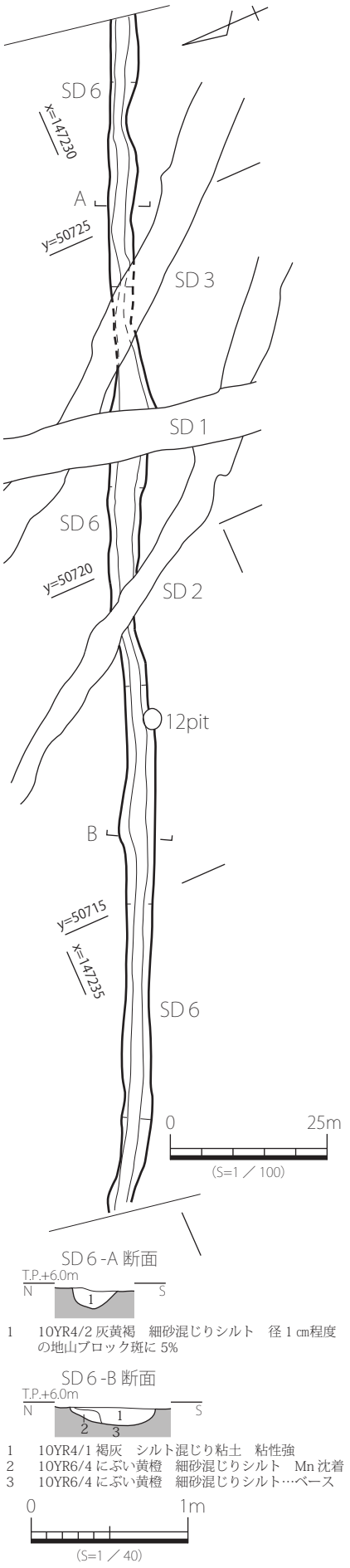
遺物は、二次加工のある剥片（S ７）、微細剥離痕のある剥片（S ８）と弥生土器片が出土している。

ＳＤ２（図 11・15）

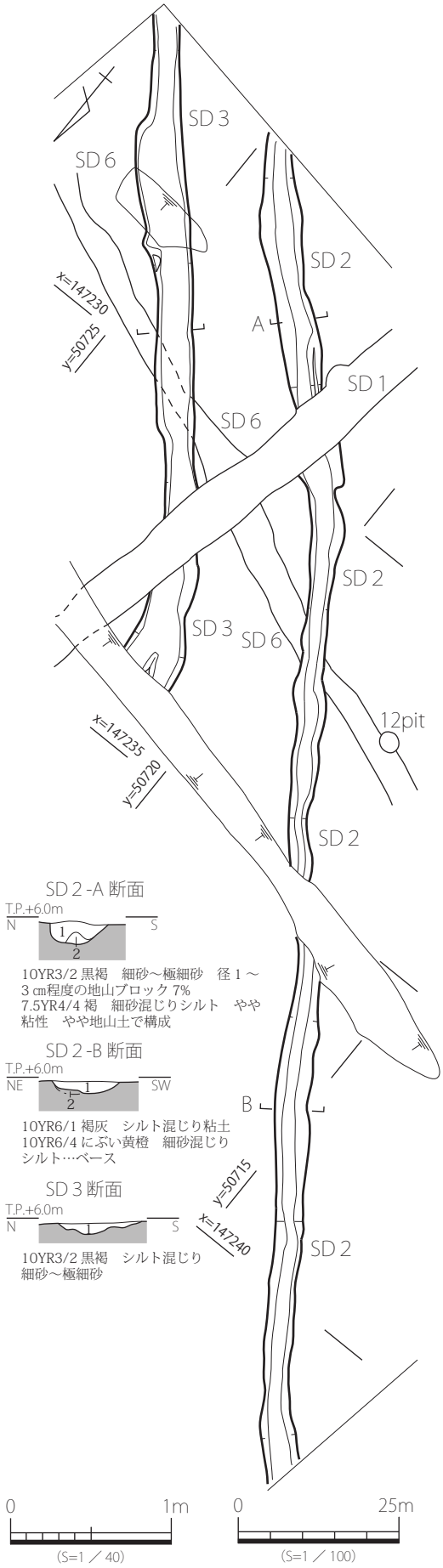
調査区を北西から南東に斜行して調査区外に延びる溝である。SD 1 に切られ、SD 6 を切る。検出長 21.0m、最大幅 0.7m、最大深は東南側で 0.14m、北西側で 0.07m を測る。主軸方位は N-38.9°-W である。

断面形状は東南側で逆台形、北西側で浅い皿状を呈する。埋土は、東南側で上層が黒褐色細砂～極細砂、下層が褐色細砂混じりシルト、北西側で褐灰色シルト混じり粘土の単層である。

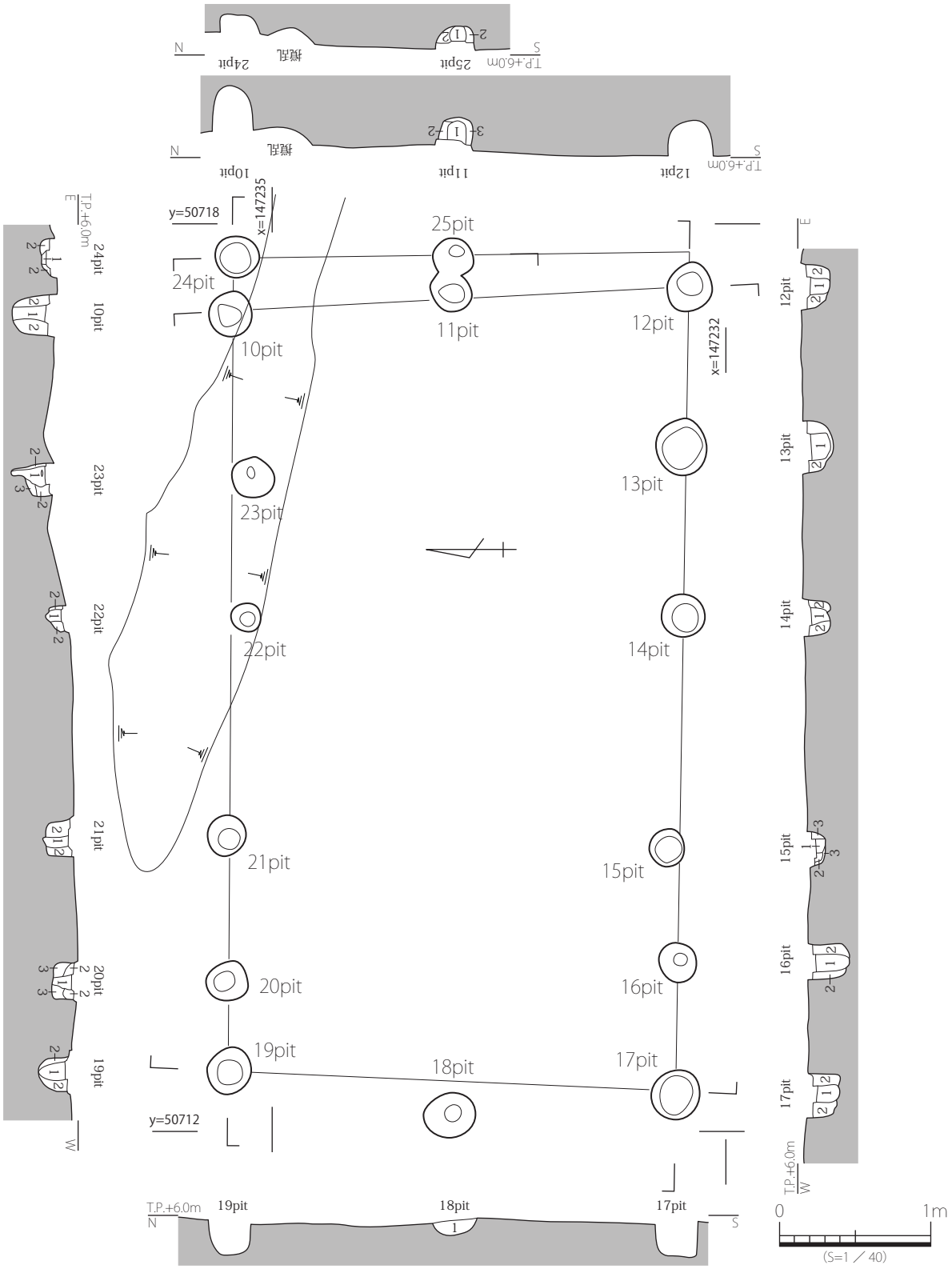
遺物は弥生土器壺（41）、弥生土器片が出土しているが、詳細な時期は不明である。



第 10 図　SD ６平・断面図

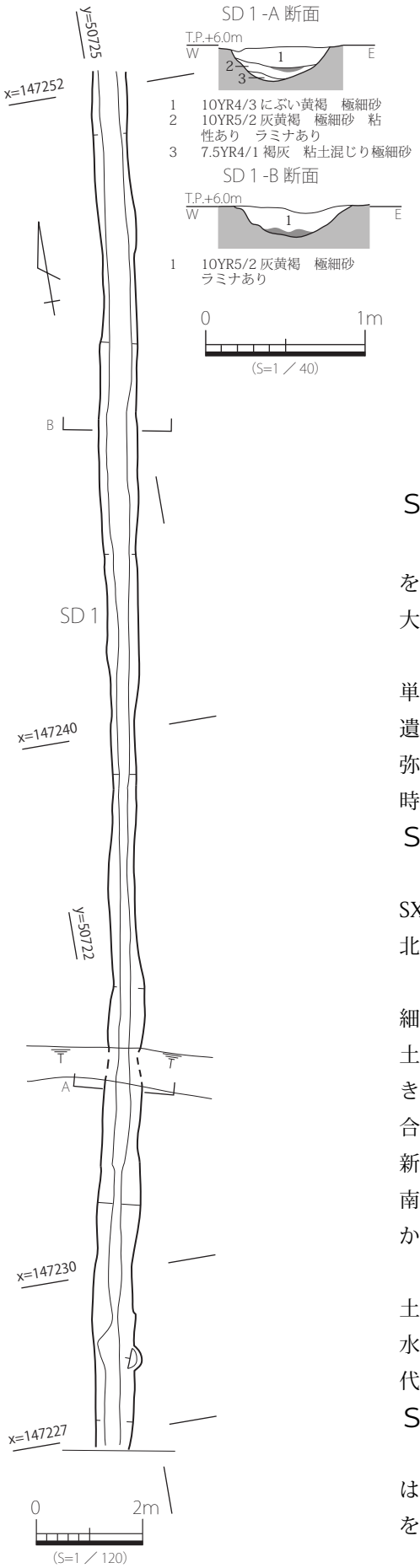


第 11 図　SD ２・３平・断面図

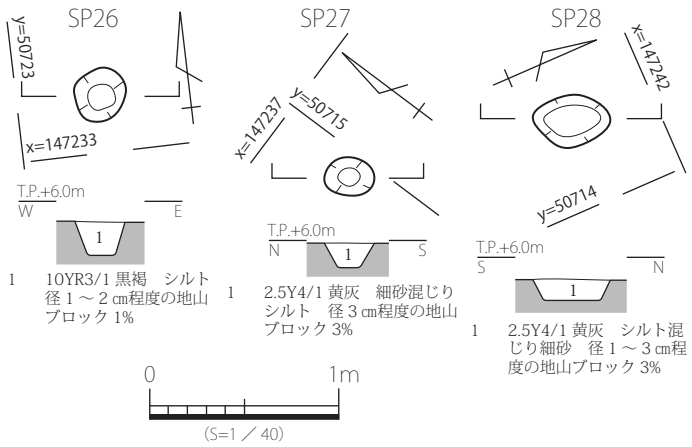


10pit 1　10YR3/2 黒褐　極細砂～シルト
　　2　10YR3/3 暗褐　中粒砂混じり極細砂～シルト
11pit 1　10YR3/1 黒褐　細砂～シルト
　　2　10YR3/3 暗褐　極細砂～シルト
　　3　10YR4/2 灰黄褐　極細砂～シルト
12pit 1　10YR4/2 灰黄褐　極細砂～シルト
　　2　10YR3/3 暗褐　極細砂～シルト　径1～3㎝程度の地山ブロック斑に 5%
13pit 1　10YR3/2 黒褐　極細砂～シルト
　　2　10YR4/2 灰黄褐　極細砂～シルト
14pit 1　10YR3/2 黒褐　極細砂～シルト
　　2　10YR4/2 灰黄褐　極細砂～シルト　径2㎝程度の地山ブロック斑に 5%
15pit 1　7.5YR3/1 黒褐　極細砂～シルト
　　2　10YR3/1 黒褐　極細砂～シルト
　　3　10YR4/2 灰黄褐　極細砂
16pit 1　7.5YR3/1 黒褐　極細砂～シルト
　　2　10YR4/2 灰黄褐　極細砂～シルト
17pit 1　10YR3/2 黒褐　極細砂～シルト
　　2　10YR4/2 灰黄褐　極細砂～シルト　径1㎝程度の地山ブロック 3%
18pit 1　10YR4/2 灰黄褐　極細砂～シルト
19pit 1　10YR3/2 黒褐　小礫混じり極細砂～シルト
　　2　10YR4/2 灰黄褐　中粒砂混じり極細砂～シルト
20pit 1　10YR3/2 黒褐　極細砂～シルト
　　2　10YR4/2 灰黄褐　中粒砂混じり極細砂～シルト
　　3　10YR4/2 灰黄褐　極細砂
21pit 1　10YR3/1 黒褐　極細砂～シルト
　　2　10YR3/2 黒褐　極細砂～シルト
22pit 1　10YR3/2 黒褐　極細砂～シルト
　　2　10YR4/2 灰黄褐　極細砂～シルト　径1～2㎝程度の地山ブロック斑に 2%
23pit 1　10YR3/1 黒褐　極細砂～シルト　石器含む
　　2　10YR3/2 黒褐　極細砂～シルト
　　3　10YR4/3 にぶい黄褐　極細砂～シルト
24pit 1　10YR3/1 黒褐　極細砂～シルト
　　2　10YR4/2 灰黄褐　極細砂～シルト　径1～3㎝程度の地山ブロック斑に 7%
25pit 1　10YR3/2 黒褐　中粒砂混じり極細砂～シルト
　　2　10YR4/2 灰黄褐　中粒砂混じり極細砂～シルト　径1～2㎝程度の地山ブロック斑に 3%

第 12 図　掘立柱建物 1 平・断面図



第 13 図 SD 1 平・断面図



第 14 図 SP 平・断面図

ＳＤ３（図 11・15）

SD 2 に平行して調査区外に延びる溝で、SD 1 に切られ、SD 6 を切る。撹乱により北側は検出できなかった。検出長 10.6m、最大幅 0.9m、最大深 0.07m を測る。主軸方位は N-38.7 ° -W である。

断面形状は不整形で、埋土は黒褐色シルト混じり細砂～極細砂の単層である。北端部で二股に分かれる様相が見られるが明確でない。遺物はサヌカイト剥片２点（S10･S11）、甕（40）、須恵器杯（39）、弥生土器底部、弥生土器片が出土した。出土遺物の年代から、奈良時代以降と考えられる。

ＳＤ１（図 13・15）

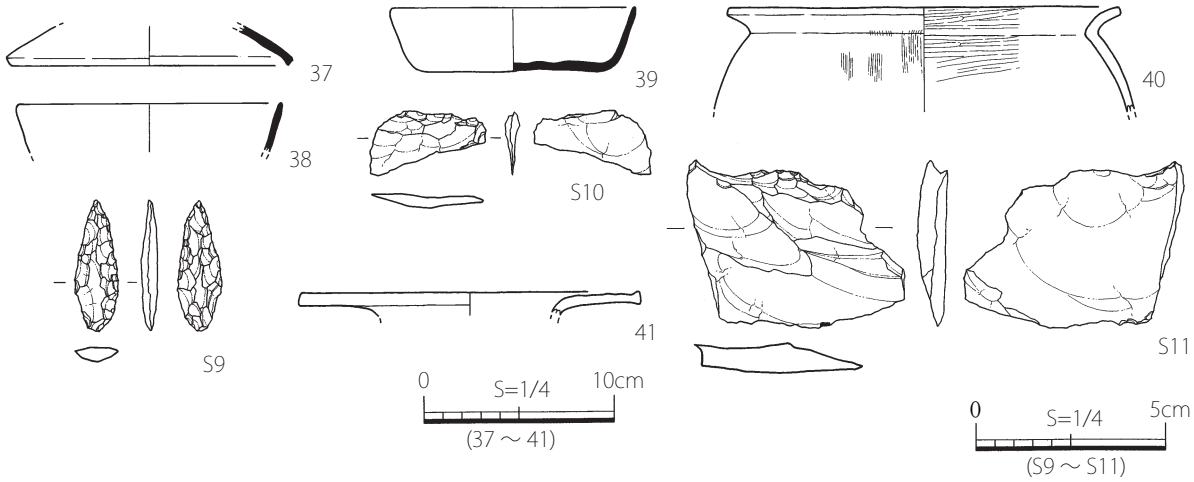
調査区を南北に縦断して調査区外に延びる溝で、SD ２・３・６・SX ８を切る。検出長 65.0m、最大幅 0.8m、最大深は南側で 0.21m、北側で 0.18m を測る。主軸方位は N-9.8 ° -E である。

断面形状は皿状を呈する。埋土は、南側で上層がにぶい黄褐色極細砂、中層が灰黄褐色極細砂でラミナが確認でき、下層が褐灰色粘土混じり極細砂である。北側では灰黄褐色極細砂でラミナが確認できる。埋土が他の遺構とは異なり、灰色の極細砂であること、切り合い関係をもつ遺構をすべて切っていることから、当調査区で最も新しい時期の遺構と考えられる。調査区が位置する地形には沿わず、南北方向に真直ぐに掘削されており、またラミナが認められることから、条里と関連した水路であった可能性が考えられる。

遺物は石鏃（S ９）、須恵器蓋（37）、須恵器壺（38）、弥生土器片、土師器片、須恵器片が出土した。出土遺物は非常に磨滅していたが、水流によって磨滅したものと推定できる。埋土の状況から、奈良時代以降～中世の遺構と考えられる。

ＳＰ 26（図 14）

調査区中央東側で検出したピットで、平面形状は円形、断面形状は逆台形を呈する。最大長 0.27m、最大幅 0.26m、最大深 0.18m を測る。埋土は黒褐色シルトで単層である。遺物は出土していない。



第 15 図　SD1・2・3 出土遺物

ＳＰ 27（図 14）

調査区中央西側で検出したピットで、平面形状はやや楕円形、断面形状は逆台形を呈する。最大長 0.26m、最大幅 0.2m、最大深 0.13m を測る。埋土は黄灰色細砂混じりシルトで単層である。遺物は出土していない。

ＳＰ 28（図 14）

調査区北西部で検出したピットである。平面形状は楕円形、断面形状は逆台形を呈する。最大長 0.4m、最大幅 0.27m、最大深 0.11m を測る。埋土は黄灰色シルト混じり細砂で単層である。遺物は出土していない。

包含層

重機掘削中に弥生土器片、土師器片、陶器片が、精査中に弥生土器片、土師器片が出土した。

第４章　まとめ

第１節　遺跡と遺構

本遺跡は、旧香東川から派生する旧河道域に位置するとともに、海からの影響を受ける三角州に近い環境にあったと想定される。このことから、縄文時代晩期以前は、河川の活発な活動により不安定な土地条件であったと推測される。以前の調査では、縄文時代晩期以降の遺構や遺物がまとまって出土しており、河川の活動が比較的治まったと想定される。

今回の調査では、弥生時代中期と弥生時代後期、古代以降、中世の４時期に区分することができる。このうち、弥生時代中期の遺構から出土した遺物では、遺構による時期的な差異はなく、短期間に形成されたと考えられる。また調査区中央より北側では、弥生時代の遺構を確認できず、弥生時代中期～後期の集落の北端にあたると考えられる。

以前の調査で検出した縄文時代晩期～弥生時代前期の遺構や遺物は確認できなかったことから、遺跡周辺の狭い範囲内で時期ごとに異なった土地利用がなされていた可能性がある。調査地は、西側から東側へと緩やかに傾斜する平地に位置し、遺構面も現在の地形と同様に西側が高く、東側が低い地形を呈する。遺構は、調査区南側の微高地上で検出した。弥生時代と奈良時代の溝は、地形に沿って溝が掘削されているが、ＳＤ１のみこの地形に沿わず、南北方向に掘削され、また一定の水流があったことがうかがえる。この溝が条里に伴う溝かどうかの判断は、今回の調査ではできないが、中世段階までにこの地域の土地利用が大きく変更された可能性が考えられる。

第２節　遺物について

今回の調査で出土した遺物は、弥生時代中期のものが土坑から、弥生時代後期の遺物が落ち込み状の遺構から出土した。完形品は無く、破損した土器をまとめて土坑などに投棄したものと考えられる。

遺物の器種は、甕と壺が大半で、高杯や鉢といった器種は一定量認められる。また、在地の胎土とは異なる遺物も一定量認められることから、本遺跡以外の地域とも交流があったことがうかがえる。今回の調査地は、集落の中心からは外れた箇所である可能性が高く、南西方向の微高地上に展開していると考えられる居住部分について、調査事例の蓄積を待ちたい。

第１表　土器観察表

報文番号	遺構／層位名	種類	器種	時期	法量			調整		色調		胎土		焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
1	SK 7	弥生土器	甕	Ⅲ様式	13.8	―	(8.2)	ﾏﾒﾂ・ﾀﾀｷ？	ﾏﾒﾂ	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	粗	4㎜以下の石英・長石を含む、1.5㎜程度の赤色粒を含む	良	９と同一個体の可能性あり
2	SK 7	弥生土器	甕	Ⅲ様式	18.3	―	(6.8)	ﾏﾒﾂ・ﾀﾀｷ？	ﾅﾃﾞ	にぶい黄橙 10YR6/4	灰黄褐 10YR5/2	普	1㎜以下の石英・長石、0.5㎜以下の金雲母・角閃石を含む	良	
3	SK 7	弥生土器	甕	Ⅲ様式	21.2	―	(16.3)	ﾅﾃﾞ・ﾊｹのちﾐｶﾞｷ・一部ﾊｹﾘ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄褐 10YR5/4	にぶい黄褐 10YR5/4	普	4㎜以下の石英・長石等を含む、0.5㎜程度の角閃石を含む	良	
4	SK 7	弥生土器	甕	Ⅲ様式	22.0	―	(12.4)	ﾅﾃﾞ・ﾐｶﾞｷ・ﾏﾒﾂ	指ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	にぶい黄橙 10YR7/2	灰黄褐 10YR6/2	普	3㎜以下の石英・長石を含む	良	
5	SK 7	弥生土器	甕		19.0	―	(6.6)	ﾊｹ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	灰黄褐 10YR5/2	にぶい黄褐 10YR5/3	普	3㎜以下の長石、1㎜以下の金雲母含む	良	
6	SK 7	弥生土器	甕	―	―	―	―	ﾊｹ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ・刻目	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙 10YR6/4	灰黄 2.5Y6/2	普	0.5㎜以下の石英・長石を含む	良	外面に黒班あり
7	SK 7	弥生土器	壺	―	―	―	―	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ・列点文	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	暗灰黄 2.5Y5/2	黄褐 2.5Y5/3	普	1㎜以下の石英・長石を含む	良	
8	SK 7	弥生土器	甕	―	―	―	(3.3)	ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	にぶい黄橙 10YR7/2	灰白 10YR8/1	普	1㎜以下の石英・長石を含む	良	
9	SK 7	弥生土器	甕	―	―	―	(3.8)	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	明赤褐 5YR5/8	橙 5YR6/6	やや粗	3.5㎜以下の石英・長石等を含む、1㎜程度の赤色粒を含む	良	１と同一個体の可能性あり
10	SK 7	弥生土器	甕	―	―	―	(3.7)	ﾅﾃﾞ・ﾊｹ	ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	にぶい橙 7.5YR6/4	灰黄褐 10YR6/2	普	3㎜以下の石英・長石を含む	良	
11	SK 7	弥生土器	甕	―	―	3.1	(4.6)	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ	灰黄褐 10YR4/2	黒褐 10YR3/2	普	1㎜以下の石英・長石を含む	良	
12	SK 7	弥生土器	甕	―	―	3.2	(3.1)	板ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	指ｵｻｴ	灰黄褐 10YR4/2	灰黄褐 10YR4/2	普	1㎜以下の石英・長石含む	良	底部に穿孔あり
13	SK 7	弥生土器	無頸壺	Ⅲ様式	―	―	(5.5)	ﾅﾃﾞ・櫛描直線文11本 ﾀﾃﾊｹのち櫛描波状文５本	ﾏﾒﾂ	灰白 10YR8/2	灰 5Y5/1	やや粗	1～3㎜の石英・長石を含む	良	外面に黒班あり
14	SK 7	弥生土器	壺	Ⅲ様式	10.6	―	(9.1)	ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	指ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/2	粗	4㎜以下の石英・長石、2㎜以下の赤色粒含む	良	搬入品か？
15	SK 7	弥生土器	壺	―	―	6.4	(7.2)	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指ｵｻｴ・ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	灰白 10YR8/1	灰白 10YR8/2	普	2㎜以下の石英・長石・赤色粒含む	良	外面に黒班あり 搬入品か？
16	SK 5 最下層	弥生土器	甕	Ⅲ様式	17.0	―	(8.6)	ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	にぶい黄褐 10YR5/3	灰黄褐 10YR5/2	普	3.5㎜以下の石英・長石、0.5㎜程度の金雲母を含む	良	
17	SK 5 最下層	弥生土器	甕	Ⅲ様式	19.0	―	(10.0)	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR6/3	普	3㎜以下の石英・長石、0.5㎜程度の雲母、1㎜程度の赤色粒を含む	良	
18	SK 5 最下層	弥生土器	甕	Ⅲ様式	20.0	―	(4.6)	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾀﾃﾊｹ	ﾏﾒﾂ	にぶい褐 7.5YR5/4	黒 5Y2/1	普	1㎜以下の石英・長石を含む	良	
19	SK 5 下層	弥生土器	甕	―	―	―	(3.6)	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	明褐 7.5YR5/6	にぶい黄褐 10YR5/3	普	0.5㎜以下の角閃石、1～2㎜以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
20	SK 5 最下層	弥生土器	甕	Ⅲ様式	―	―	―	ﾅﾃﾞ・刻目・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	にぶい黄褐 10YR5/3	黄褐 2.5Y5/3	普	0.5㎜以下の石英・長石・金雲母含む	良	
21	SK 5 最下層	弥生土器	甕	―	―	7.8	(6.7)	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	暗灰黄 2.5Y5/2	黄灰 2.5Y4/1	普	2㎜以下の石英・長石・金雲母を含む	良	
22	SK 5 最下層	弥生土器	甕	―	―	6.2	(6.2)	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾏﾒﾂ	板ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	明赤褐 5YR5/6	黒褐 7.5YR3/1	普	2㎜以内の石英・長石・角閃石・雲母・赤色粒を含む	良好	
23	SK 5 最下層	弥生土器	甕	―	―	―	(16.8)	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	板ﾅﾃﾞ	灰黄褐 10YR5/2	灰黄褐 10YR6/2	粗	2㎜以下の石英・長石・雲母・赤色粒を含む	良好	
24	SK 5 最下層	弥生土器	甕	―	―	8.0	(15.7)	ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ﾍﾗﾐｶﾞｷ・指ｵｻｴ	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄褐 10YR5/3	普	1.5㎜以内の石英・長石・雲母・赤色粒あり	良好	外面体部に黒班あり
25	SK 5 下層	弥生土器	鉢	―	22.8	―	(15.9)	刻目・ﾍﾗﾐｶﾞｷ・ﾖｺﾅﾃﾞ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄褐 10YR5/3	明赤褐 5YR5/6	普	0.5～2㎜以下の石英・長石を含む	良	搬入品か？
26	SK 5 最下層	弥生土器	壺	Ⅲ様式	15.6	―	(2.7)	口縁部：斜行子文　体部：ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	灰白 10YR8/1	灰白 10YR8/1	粗	2㎜以下の石英・長石・赤色粒を含む	良好	

第２表　土器観察表

報文番号	遺構／層位名	種類	器種	時期	法量			調整		色調		胎土		焼成	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面				
27	SK 5 最下層	弥生土器	壺	Ⅲ様式	12.2	―	(5.7)	貼付突帯２条 ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	粗	4 ㎜以下の石英・長石・赤色粒を含む	良	
28	SK 5 最下層	弥生土器	壺	Ⅲ様式	―	10.0	(17.6)	ﾀﾃﾊｹ・櫛描波状文（1 束 5 本）２条・ﾍﾗﾐｶﾞｷ	指ｵｻｴ・ﾊｹ	灰黄褐 10YR6/2	黒 N2/	普	0.5 ㎜以下の石英・長石を含む	良 好	
29	SK 5 最下層	弥生土器	壺	―	―	6.4	(13.1)	板ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ・指ｵｻｴ	淡橙 5YR8/3	にぶい橙 5YR7/3	粗	2 ㎜以内の石英・長石・赤色粒を含む	良	外面の黒班あり 搬入品か？
30	SK 5 最下層	弥生土器	鉢	―	―	10.4	(13.3)	櫛描直線文・櫛描波状文(4 条)・ﾏﾒﾂ	ﾀﾀｷ・ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	橙 5YR7/6	灰褐 7.5YR6/2	粗	5 ㎜以下の石英・長石等を多量に含む	良	底部に穿孔あり 搬入品か？
31	SK 5 最下層	弥生土器	鉢	―	―	13.6	(6.0)	ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	ﾅﾃﾞ	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	普	3 ㎜以下の石英・長石等を含む、1 ㎜程度の赤色粒あり	良	外面に煤？付着
32	SX 8	弥生土器	壺	―	―	―	―	ﾊｹ・ﾏﾒﾂ	指ｵｻｴ・板ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	普	5 ㎜以下の石英、長石、赤色粒含む	良	体部のみ残存
33	SX 8	弥生土器	壺	Ⅴ-6	13.5	6.4	21.0	ﾊｹ・ﾏﾒﾂ	指ｵｻｴ・板ﾅﾃﾞ・ﾍﾗｹｽﾞﾘ	にぶい黄橙 10YR5/3	灰黄褐 10YR5/2	普	5 ㎜以下の砂粒含む	良	外面に黒班あり
34	SX 8	弥生土器	壺	Ⅴ様式	―	8.0	(21.8)	ﾊｹ・ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	指ｵｻｴ・板ﾅﾃﾞ・ﾏﾒﾂ	灰黄 2.5Y7/2	褐灰 10YR4/1	普	5 ㎜以下の石英、長石、赤色粒含む	良	穿孔１か所あり 搬入品か？
35	SX 8	弥生土器	高杯	Ⅴ様式	―	―	―	分割ﾍﾗﾐｶﾞｷ・円盤充填	分割ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄褐 10YR5/3	粗	2 ㎜以内の石英・長石・角閃石・赤色粒を含む	良 好	
36	SX 8	弥生土器	高杯	―	―	―	―	櫛描文・ﾅﾃﾞ	指ｵｻｴ・絞り目	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい黄褐 10YR5/4	精良	1 ㎜以下の金雲母、2 ㎜以下の角閃石、4 ㎜以下の長石・赤色粒を含む	良 好	
37	SD 1	須恵器	蓋	古代	14.5	―	(2.0)	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	灰白 2.5Y8/1	浅黄 2.5Y7/4	普	0.5 ～ 2 ㎜以下の石英・長石を含む	良	
38	SD 1	須恵器	壺	古代	13.8	―	(2.6)	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	灰白 5Y7/1	灰黄 2.5Y7/2	普	0.5 ㎜以下の石英・長石を含む	良	
39	SD 3	須恵器	杯	古代	12.8	10.0	3.4	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	普	0.5 ㎜以下の石英・長石黒色粒を含む	良	
40	SD 3	弥生土器	甕	Ⅴ様式	20.5	―	(5.6)	ﾖｺﾅﾃﾞ・ﾊｹ	ﾍﾗﾐｶﾞｷ	にぶい褐 7.5YR5/4	明褐 7.5YR5/6	普	1 ㎜以下の石英・長石・金雲母を含む	良	
41	SD 2	弥生土器	高杯	Ⅲ様式	17.8	―	(1.3)	ﾏﾒﾂ	ﾏﾒﾂ	にぶい褐 7.5YR5/4	にぶい橙 7.5YR6/4	普	0.5 ～ 1 ㎜以下の石英・長石・角閃石を含む	良	

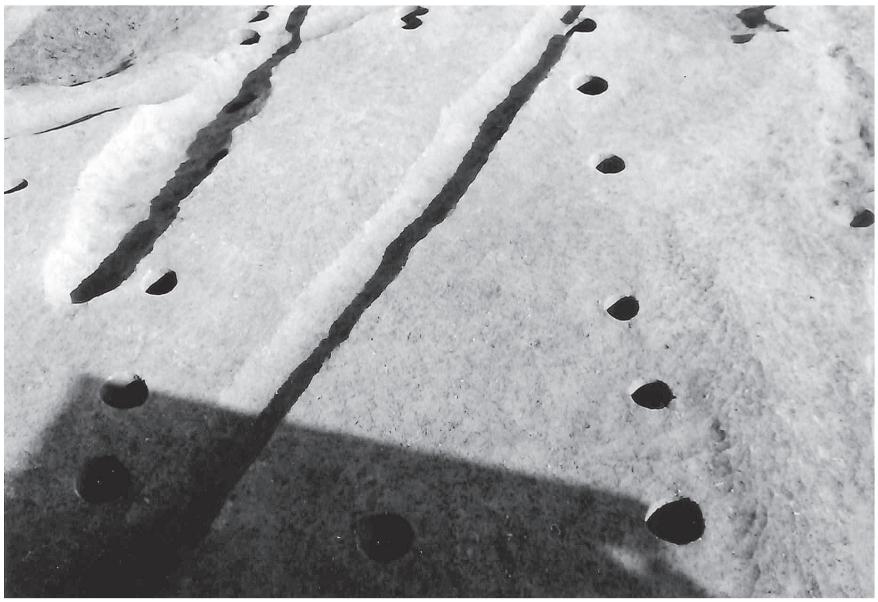
第３表　石器観察表

報文番号	遺構／層位名	器種	法量				石材	備考
			長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重量 (g)		
S1	SK 7	微細剥離痕のある剝片	4.7	5.0	1.5	31.9	ｻﾇｶｲﾄ	両側辺に微細剥離痕あり
S2	SK 5	たたき石	(13.4)	6.5	5.1	(507.2)	砂岩	端部・体部・側辺に敲打痕あり
S3	掘立柱建物１ 10pit	剝片	1.9	2.4	0.4	2.3	ｻﾇｶｲﾄ	両端潰れ
S4	掘立柱建物１ 23pit 柱痕	微細剥離痕のある剝片	4.5	4.75	0.7	10.9	ｻﾇｶｲﾄ	端部・両側辺に微細剥離痕あり
S5	SX 8	スクレイパー	3.5	4.55	0.8	12.1	ｻﾇｶｲﾄ	剝片端部に刃部を作り出す
S6	SX 8	たたき石	14.4	8.5	5.8	1083.9	砂岩	一部に敲打痕あり
S7	SX 8	たたき石	10.5	10.4	5.7	759.8	砂岩	全側辺に敲打痕あり
S8	SX 8	石皿	20.9	16.0	10.7	4500.0	砂岩	使用痕あり
S9	SD 1	石鏃	3.5	1.2	0.4	1.8	ｻﾇｶｲﾄ	凸基Ⅱ式 全体に磨滅
S10	SD 3	剝片	1.7	3.1	0.4	1.2	ｻﾇｶｲﾄ	
S11	SD 3	微細剥離痕のある剝片	4.4	5.8	0.9	20.5	ｻﾇｶｲﾄ	端部に微細剥離痕あり

図版1

全景（南東から）

全景（北西から）

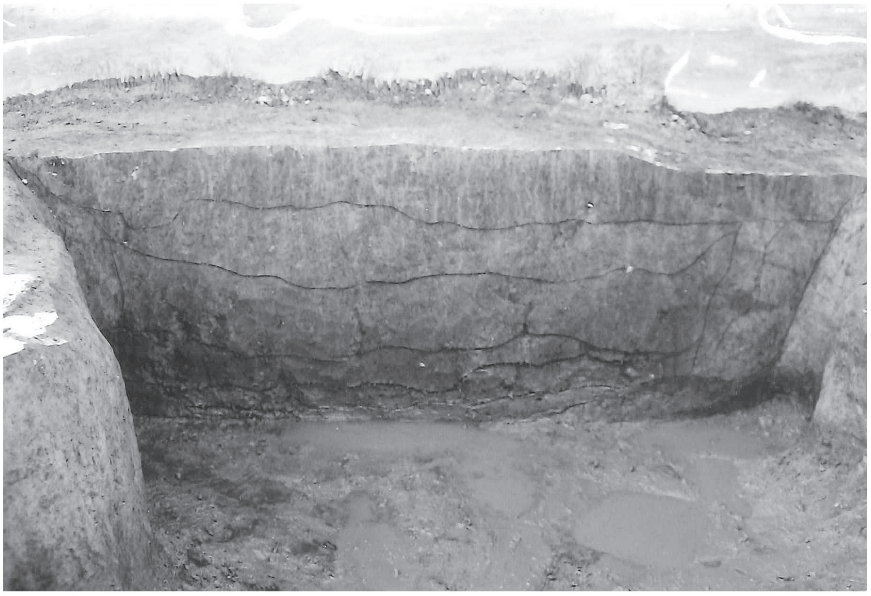


掘立柱建物１
完掘状況（西から）

図版2

SX 8　遺物出土状況
（北から）

SX 8　A 断面（東から）



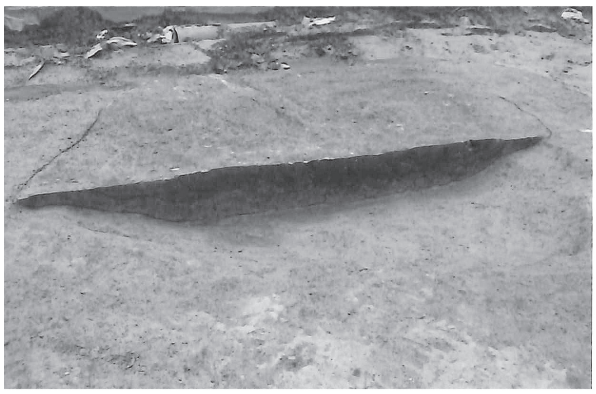
SK 5（東から）

SD 1　A 断面（南から）

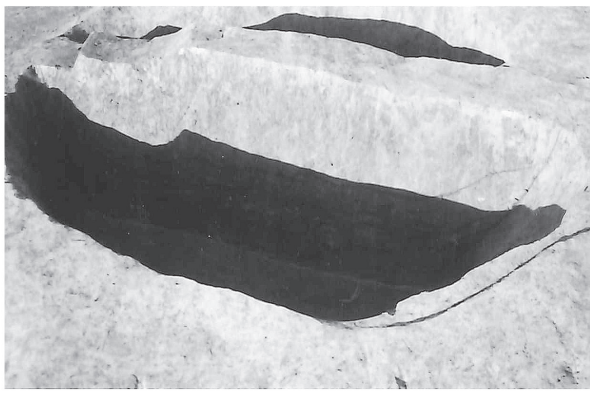
SD 2　A 断面（西から）

SD 3（西から）

SD 6　A 断面（西から）

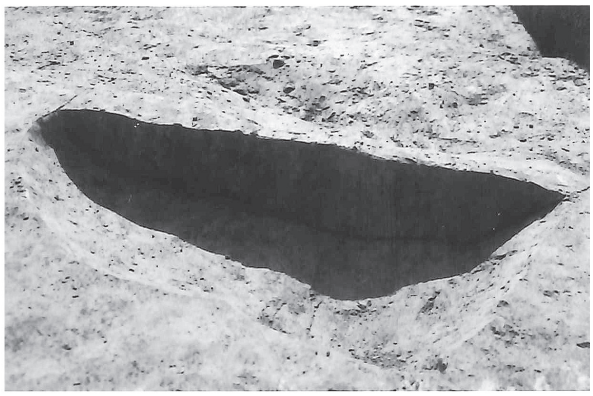


SK 4（北から）



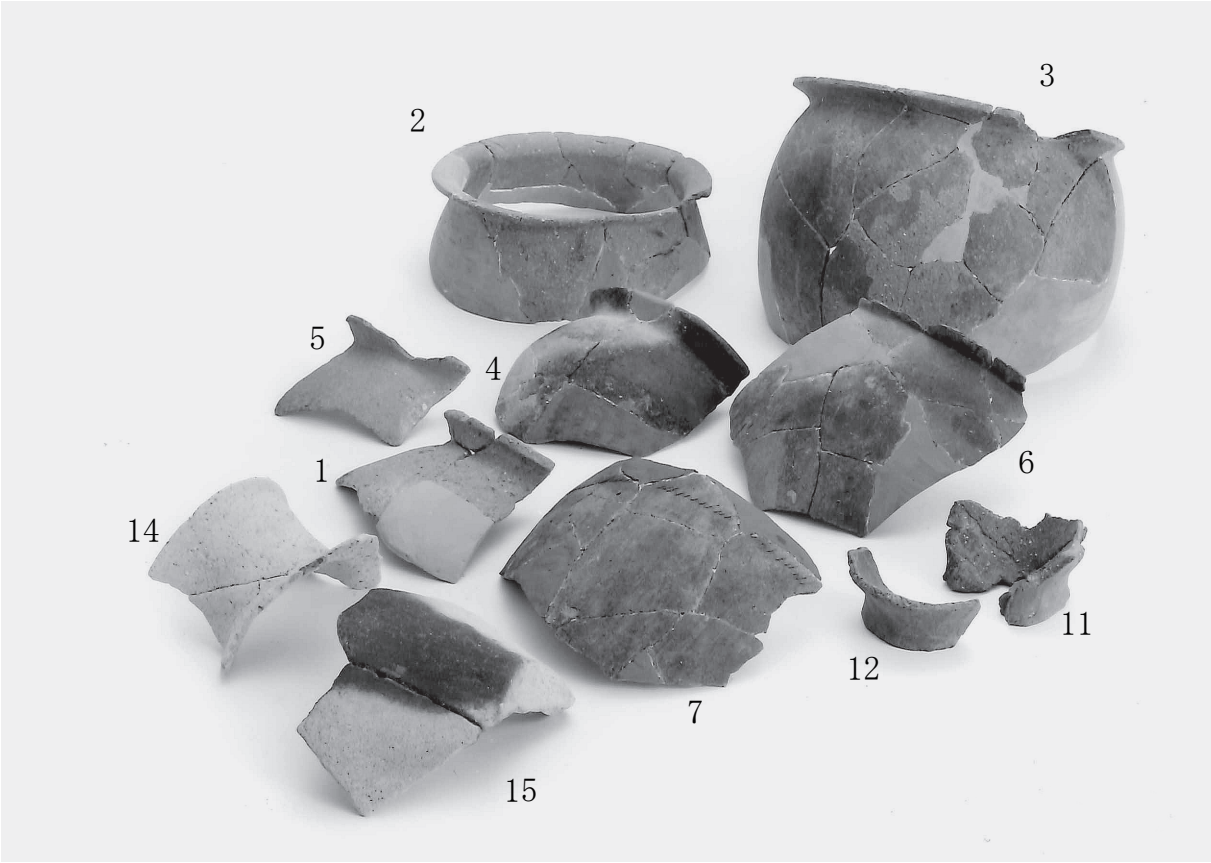
SK 7（東から）

SK 9（北西から）



SK29（北から）

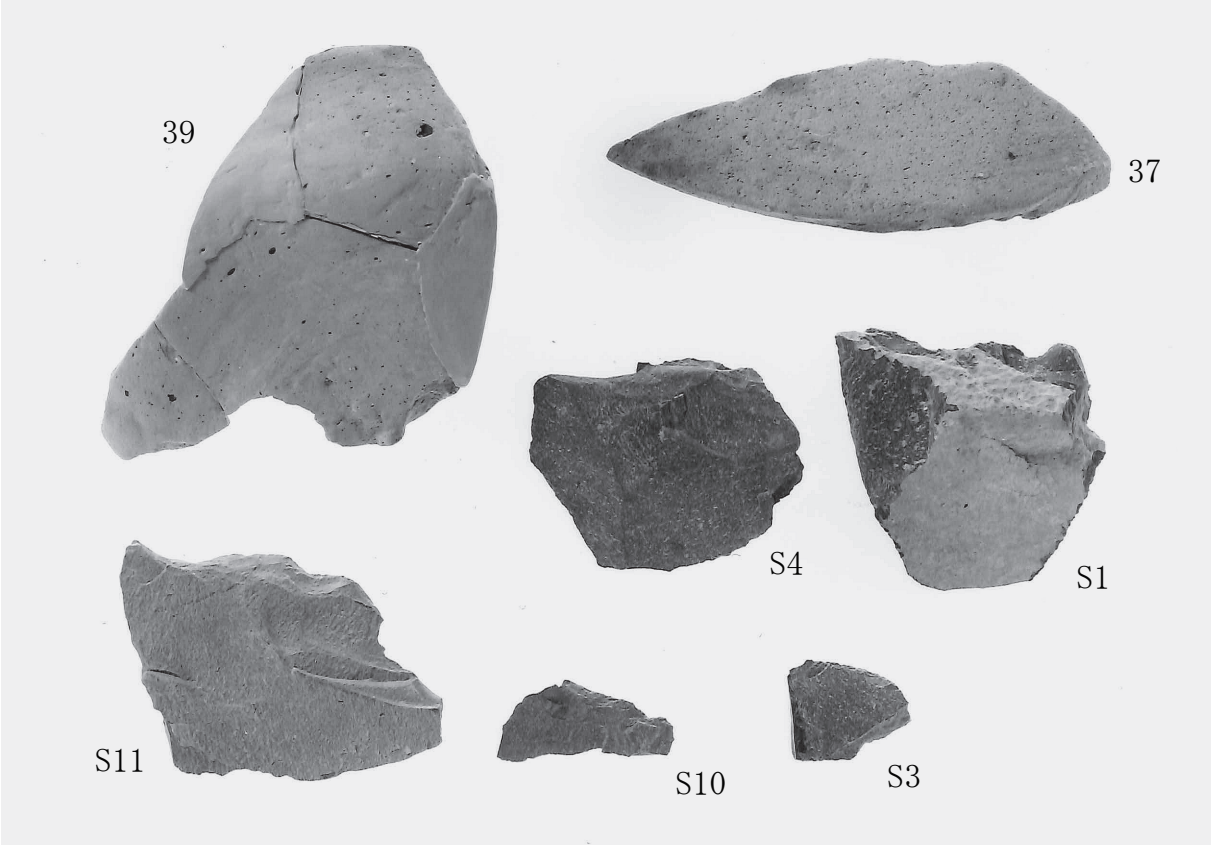
図版4



SK 7 出土遺物

SK 5 出土遺物

SX 8出土遺物



SD 1・SD 3・掘立柱建物1出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひがしなかすじいせき
書名	東中筋遺跡
副書名	店舗新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 162 集
編著者名	舩築 紀子・磯崎 福子
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒 760-8571　香川県高松市番町一丁目 8 番 15 号　℡.087(839)2660
発行年月日	平成 27 年 6 月 30 日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひがしなかすじいせき 東中筋遺跡	桜町二丁目	37201		34° 19′ 14″	134° 3′ 14″	H26.12.3 ～ 12.11	255㎡	店舗建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	
東中筋遺跡	集落	弥生時代 古代 中世	溝、土坑、性格不明遺構 掘立柱建物 溝 溝	弥生土器、石器 須恵器、土師器 須恵器	

高松市埋蔵文化財調査報告第 162 集

店舗新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

東中筋遺跡

平成 27 年 6 月 30 日　発行

発　行　　香川県農業協同組合
高松市寿町一丁目 3 番 6 号

編　集 / 発　行　高松市教育委員会
高松市番町一丁目 8 番 15 号

印　刷　　有限会社　中央ファイリング
高松市伏石町 2157-7